

静かに広がる『価値観』のシフト

ながれ

園田 由未子 (そのだ ゆみこ / NPO 法人愛のまちエコ倶楽部)

持続可能な社会をめざす、資源循環の取り組み『菜の花プロジェクト』。滋賀県東近江市の田園地域でその実践を柱に活動しているのが『NPO法人愛のまちエコ倶楽部』だ。環境教育やグリーンツーリズム、新規就農や移住支援、農家民泊の事務局など年々活動が幅広くなっている中、3年前から事務局長を担うことになった。1981年千葉県生まれ。バブル崩壊10歳。アメリカ同時多発テロ事件20歳、福島原子力発電所事故30歳。来年の40歳を前にして、このコロナ禍…という世代。

14年という間、私が熱量を持ってこの仕事に取り組みしてきた源泉は、ザックリ2つ。

1つは、まさにこの地域の人々の『市民力』。

- ・40年の間、廃食油のせっけんづくりを地道に続けているお母ちゃんたち
- ・早期退職し、農家レストランで地域のためにエプロンをしめる元市役所課長
- ・里山保全に関わって、ついには薪屋さんになってしまった人
- ・ブルーベリー摘み取り体験の受入れから始まり、農家民泊を開業した元町長さんご夫婦

文字数が限られているので、挙げきれないが、その他本当にたくさんの”地域の偉人”たちが存在する。それぞれの実践に、更に関わる人の裾野が広がり、それが『まちを創っていく』。その土台が次の『市民力』を生み出しているのだ。私もその流れの中の一人として実感を持てるのが大きな原動力になっているし、最近は次の世代にバトンをつないでいかねば！という思いも強い。

2つ目は、社会の価値観が変わってきている実感。事務局は6人中5人が20代～30代。最近立て続けに若手の入社があったが、モノ

ではない豊かさや、人や自然との『共生』を大切にしたいという価値観は共有している。気負わず自然体で、「だって、その方が素敵でしょ？」というスタンスが特徴だと思う。

新規就農や移住支援事業でも感じる。この10年で支援してきたのは30～40代の方が多く、公務員からブドウ農家、警察官からメロン農家、コンサル会社から豆農家などなど。経済的な価値観では当然あり得ない。空き家の案内をしても、「井戸水が出るの？最高ですね」「循環の暮らし、良いですよ」と普通に会話できる。(以前は循環の説明が必要だった)最近、雑誌でも『ローカル』志向やシンプルな『暮らし』といったテーマが増えたが、これらの志向は、持続可能な暮らしづくりととても親和性が高いと思う。全国的にも、そうした事例は無数に生まれてきているし、共感する人は確実に増えている。

農家民泊事業からも感じられることがある。国内・国外からの修学旅行で、昨年度は約1,450人がこの地域の民泊を利用。寺や観光地ではなく、滋賀の田舎で民泊を選ぶのは何故か。子どもたちに体験させたいのは、人と人との交流、農村に残る自然や文化、食の現場など。裏を返せば、哀しいかな日常にそういったものが失われつつある現れなのだが、先生や親たちの価値観の変化とも取れる。

『菜の花プロジェクト』自体が実践をもとに社会を変えていこうという運動。たくさんの人々が『価値観』や『暮らし』をシフトしていけば、オセロを返すように社会に変化をもたらすことができると思っている。多様な形で、このシフトを実践する『市民力』の裾野は、今静かに広がっていると信じている。